



## 最初に

---

ドッペルゲンガーはどこにでも居る。誰でも、みんな、毎日もう一人の自分に出会っている。意識していないだけで。

例えば鏡の中に居る私だ。仕事や学校に行くとき、夜どこかに出かけるとき、身支度を整えるために必要不可欠な人物だ。特に祝い事となれば最高の状態で家を留守にしたいと誰でも思うだろう。……ああ、でももしかしたら、ドッペルゲンガーに会ったことがない人もいるかもしれない。どこか遠くの世界に住む誰かはそうかもしれない。

けれど、それはともかくとして、私は知りたい。生きているもう一人の自分が存在するのかどうか。ちゃんと呼吸して、思考して、全く異なった日常を送っている私を見たいのだ。他人の私を見つけ出せれば、ここに存在する私ができるような気がするのだ。

## 鏡に映る人物について

---

鏡に映る私を見る。全身鏡だ。それが私の習慣である。

私が突っ立っていれば、鏡の中の自分も突っ立っている。まるで私が動き出すのを待ち構えているかのよう。右手を上げれば向こうも右手を上げる。（あっちの世界では現実で言う右が左で、左が右なのだけれど。）

まずは、髪を整えてみたりぐしゃぐしゃと乱してしてみたり、音楽に合わせて下手な踊りを踊ってみたりする。向こうは寸分違わず私の真似をしてくる。一通り好き勝手に遊んで飽きたところで、ぐっと首を突き出して、彼の鼻の頭に触れる寸前まで顔を近づける。

「誰ですか」

と訊ねてみる。当然、相手は私と同時に『誰ですか』と口を動かすだけで返事はない。何度やっても同じことだ。

鏡の唯一の弱点は音を出せないことにあると思う。なにを言っても声だけは真似できないのだ。私はそれを残念に思う。決して声の身だしなみは整えられないことを。（もし声も鏡に映せたとしたら音も反対になるのだろうか、いや、しかし、それでは真似をしているとは言えない。）

音も真似ができたなら、きっと愉快だろう。とはいえ、毎日それをやられたとしたら、音が同時に鳴り出してうるさくて仕方がない。……やはりこのままで良いのかもしれない。

ドッペルゲンガーを探し始めてどれくらい経ただろうか。いつから自我を持ち始め、なぜ自分が存在するのか考え始めたのは。どこかの有名な哲学者も言っていたように、私は私が存在していることが不思議でならない。私は自分が解らない。

幼い頃、私は私を見た。私といってもほとんど影を見たに過ぎない。その上、現実で起った出来事なのかどうか曖昧である。

住宅街の少し入り組んだ路地でのことだった。ちらりと振り向いたその人物の顔は、私だった。その『私』は、まるで私を誘い込むかのように、ゆらゆらと歩き出した。私は思わず追いかけた。しかし『私』（第二の私と呼ぶことにしよう。）は蜃気楼のごとく走っても走っても、一定の距離を保って逃げていく。どこまでもどこまでも、どんなに走っても。

「待って」

確かそのような、相手呼び止める言葉を口にしたと思う。

すると、第二の私はぴたりと足を止め、私に向き直った。

.....そこで記憶は途絶えている。その後どうしたのかは分からない。それに今となっては第二の私の顔もぼんやりとした影が頭に残っている程度だ。自分の顔だというのに、可笑しな話だ、とそう思うかもしれないが、あなた方は、幼い自分の姿形をはっきりと覚えているだろうか。昔の写真を見て、改めて、ああ、こんな人間だったのだ、と気が付くのは誰しも経験することであろう。

私の日課のもう一つに、広告貼りというものがある。広告には私の写真と連絡先が書いてある。そして、私が自宅を離れている間や都合が悪いときには留守番電話に設定しておく。もちろん、第二の私を捜し出すためだ。

今日も、適当な電柱やら壁に何枚も並べて貼っていく。

街中 街で人に配るのけ気が向かい、トイートイ気が減る。白公で白公を尋ねるに仕立て上げているようなものなのだから。チラシを貼っているだけでも通りがかる人たちに白い目で見られるくらいだ。わかっている。広告を貼ったところで、第二の自分が見つかるなどとは思っていない。稀に電話が鳴っても、貼紙を見たどっかの馬鹿がふざけているだけか私自身の目撃情報だったりする。ほとんど気休めに近いのだ。

『気休め』で思い出したが、最近、ドッペルゲンガー発見機なるものがあるのを知った。かなり値が張ったが思わず買ってしまった。第二の私のこととなると私は目がないのだ。ああ、ドッペルゲンガーに遭遇する方法を今までどれくらい試しただろう、合わせ鏡を覗くと未来の自分が見えるだとか……どれもうまくいかなかった。

その、妙に巨大な機械は、周辺一キロ以内にドッペルゲンガーが接近すると、大きな銀色の図体には似つかわしくなく、ぴろぴろ、と音を発し、横一列に並んだランプが光る仕組みになっている、はずだ。というのも、今まで何度か鳴ったことはあるが、現場には私と似た人間さえ居なかった。まあ、家庭専用と注意書きされているように常時家に設置してある為、また、常に移動しているであろう相手を、最大一キロ離れた私の家から駆けつけたところで、発見できるわけがないのは当然なのであるが。

しかしまだ希望は捨てていない。捨てきれていない。本当に、本当に、もしかしたら、本人からの何らかのコンタクトがあるかもしれないのだから。

……ちなみに、ドッペルゲンガー用の電話と個人的なものでは分けてあるので家族や友人からの電話と間違える心配はない。

ああ、また、目眩だ。

帰り道でのことだった。真っ青な青空。そこに浮かぶ太陽が見え隠れするのを、冷や汗が滲むように過ぎていくビルの谷間からじっと見つめて歩いていると、急な目眩に襲われたのである。

これは昔からの私の癖と言っても良いもので、目眩が迫ると、必ず記憶が途切れ途切れになってしまう……時間が右往左往するという表現の方が当てはまるかもしれない。記憶の順番がばらばらで、どれが今で、どれがさっきか、いつが今日で、いつが昨日なのか、わからなくなる。想像してみてほしい。もしまいち頭に浮かばなければ、退屈なときは時計の針が遅く進むように感じ、楽しいときは早く進むように感じられる、という体験を思い起こしてみると良いだろう。それがもっと発展したものだと考えてほしい。この場合、速度は変わるが時計の針は一定の方向に進んでいる。私の場合、針が行ったり来たりするのである。

しかも、時計は円い。どの位置に針があろうとも過去や現在の差はないのだ。だって、単に時計の針が十二時を指していた記憶と三時を指していた記憶が二つあったとしても、どちらが先でどちらが後かなんてわからないではないか。時間なんても、そんなものはない！

今回も、咄嗟に目の前にあった本屋に入ったところまでは覚えているのだが……。はた、と我に返ると、雨の日のような照明が下りる喫茶店で、落ち着き払った顔で本を読みながら、ぬるくなったコーヒーをすすっていた。

(どうやら私はさっきの店で本を買ったらしいな、なかなか無意識の私にしては、面白い内容だ。)

……一々疑問を抱いていても、仕方のないことなのである。あの本屋からどうやって喫茶店まで来たのか、なぜコーヒーを頼んだのか、無意識の間の自分は一体どんな人物なのだろうか、などと考えていてはきりが無い。こう頻繁に、こういう出来事があるとなれば。

## その日の夜

---

その日の夜から、不思議な電話がかかってくるようになった。毎日八時になると必ず。この時間帯は、受付時間外として決めている為、直接の電話対応は避けている。椅子に座って、時計の針が振れる音に耳を澄ましながら、ただじっと、自ずと回り始める録音テープを聞いているだけだ。

電話の向こうの人物は、まるで私に話しかけるかのような喋り方で、毎回何かしらの物語だとか、小話を一つしては受話器を置くのだった。話の中身は大体意味のわからないものか、だからどうした、というものばかりだった。それでも私は辛抱強く来る日も来る日も聞き続けた。暇つぶしも兼ねて何か重要な意味が隠されているのではと期待しながら。

ついでに一つだけ、電話口の人物が語った話を記しておこう。

「猫とか犬って鏡を見ると驚いてさ、ほら、鏡の後ろに回り込んでみたり、とかよくあるじゃない、あれって、自分の姿を見たことがないからでしょう、でもさ、自分が思うに、それって、自分を知らないからじゃなくて、ただ単に外側の皮膚を見た経験がないだけでさ、自分自身、自己っていうの、彼ら動物は全部理解してると思うんだよね、それからすると、人間は駄目だね、自己探求とか仰々しい名前付けて一生をかけて考えてるのに、未だにわからないなんてさ……」

久しぶりに友人と遊ぶ予定が入った。私たちのたまり場となっている、居酒屋とも喫茶店とも言い難い、看板には〇〇Barと書かれているこぢんまりとした店で、夜に集まることになった。

私たちはそれぞれ好きなように、打ち解けて振る舞った。楽しい一時だった。だらだらとしていて、たまに生暖かい沈黙が流れる、そんな雰囲気には私は満足していた。

酒も入って私は更に浮かれていた。ところがある一瞬で、理由もなく私は一切喋らなくなった。ぼうっと、友人たちが下らない話題で盛り上がっているのを聞き流して、なんともなしに窓の外を眺めていた。現実が遠のいて、幼い頃に見た、あの夢の中のような第二の私を思い出していた。酔いが回り過ぎたのか、少し頭の中がぐらぐらとしていた。

友人の一人が

「お前、まだドッペルゲンガー探してるのか」

と囁し立てても、口からは生返事しか出てこなかった。

「ああ、自分の世界に入っているな」

そう言って友人たちが笑っている声が微かに聞こえた。その言葉を受けて、私は漠然と、自分は誰だろう、と思った。第二の私の曖昧な顔が頭に現れては明らかになる前に消えていった。ぼんやりとしているのに顔は脳裏から離れようとしなかった。

その日はどうやって帰ったかはよく覚えていない。私はまた知らないうちに、目眩を起こしていたのかもしれない。記憶の片隅に覚えているのは、さっき話しかけてきた彼が

「大丈夫か」

としきりに私を心配していたことだけであった。



翌日はのんびりと過ごせた。日中は読書や映画を見たり音楽を聴いたりしていた。寝転がって窓から見上げる空は、実に爽快だった。雲の流れがゆっくりと広がる時間の流れを思わせた。いたずらの電話も鳴ることはなかった。

夕方過ぎて散歩に出た。何も考えず、思うがままに歩いた。それでも私の性分なのか、やはり人の多い場所は避けていたようだった。

川沿いを辿っていたときだった。通りがかりにギターを弾いている男と出会った。日はもうすっかり暮れて夜の帳がおりていた。

男が弾くギターの音色は河原の静けさとぴったり合致していた。どれも滑らかな川の流れを感じさせる、少し哀しげな曲であった。彼は気の向くままに、あらゆる曲を弾いていったが、その音は心臓の鼓動と同じく途切れることがなかった。

良い体験ができた、そう思って

「また会えたら」

と私は挨拶をしてその場を去った。

家に着いてみると時計の音だけが部屋にこだましていた。あまりの暗闇と無音に酷い耳鳴りがした。昔の空を飛ぶ飛行機の録音を聞いたり、トランポリンを弾いたりしたが、なぜか今夜は例のわけのわからない電話はなかった。私は変に思ったが、特に気に留めることもなくその日は寝てしまった。

どこ？

早朝だった。しつこく何かが鳴る音がして目が覚めた。すっきりしない頭で起き上がると、発見機のランプが点滅しているのが見えた。うざったく思いながらも私は立ち上がって、現在のどの辺りに第二の自分がいるのかを確認してみた。ごく近所を、何百メートルと離れていない場所を地図が指し示していた。どうせまた誰も居ないのだろう、私は溜め息をついた。しかし、やはり気になるものは気になる。うんざりする眠気が残ったまま私は外に出た。

いくつかの道を曲がって、その場所へ行った。女がたいてい、非いていそう女に朝の冷気に出た。私の頭は空に目を覚ました。やがて白い道敷に出た。声も土も通らな。空気が透んでいて白い気持だ。た。多相通い。第一の自分け子アにけ早かか。早たのけ女だ。た。巨い影た。白の士きか芋い女だ。た。女け何かを握してはスト。道敷の直ぐ中。靴の中をがさがさと漁っていたかと思うと、地面に手をつき、四つん這いになってうろうろしている。

「ないなあ、ないなあ、どこだろ」

そう言いながら、彼女はぺたぺたとてのひらを地面に叩き付けていた。

「どうしたのですか」

私は話しかけてみた。ところが、それを無視して女は、ないなあ、ないなあを繰り返している。私は再度声を張り上げて訊ねた。

「どうしたのですか、なにをなくしたのですか」

すると、女の動きが止まった。そして素早く首だけを回し、私の方を向いた。私は、どきりとも、ぎくりともした。なんだか見透かされているような気分になったのだ。女は目を見開いて、驚きを隠せないという風に、じっとこちらを見つめてきた。彼女も私も長い間沈黙していた……。

「あれ、なんだっけ、なにさがしてるんだっけ、あれ、あれ、わたし、なにをさがしているのかしら、あれってなんでしたっけ」

唐突に女は問いかけてきた。今度は、あれ、を繰り返し『あれ』を探し始めた。私は、ああなんだ、ただの狂人だったのかと落胆した。

「さあ、ぼくにはちょっとわからないですね」

できるだけ優しい言葉遣いを心がけた。狂人には細心の注意を払って会話をしないと、なにをされるかわからないからだ。

「……………ねえ、あなたはどちらさまですか」

時計の針が止まる音がした。突然の目眩が、それはそれは酷いものだった。かつて経験したことのないほどに。これは気を失ってしまう、完全に自分を失う、と私は動揺した。

おぼつかない足で後ずさり、この場から、狂った女から離れようとした。しかし、振り向いて二、三步も歩かないうちに、私は倒れてしまった。そこで意識は途絶えた。

また何かの音で目が覚めた。どうやら、発見機の音だった。私は家でおとなしく寝ていた。  
.....ということはさっきのは夢か、うるさい、頭ががんがんする.....

私は重い瞼を持ち上げた。全身が汗だくだった。神経に障る、とぼけた音を止めようと、またしても立ち上がらなくてはならなかった。

意識が朦朧とした中で、私は一つの影を認めた。

はっとした。自分以外の他人が部屋に居るのだ。

「誰」

私は小さな声で問いかけた。慎重に。

その人物は窓辺に座って、外に顔を向けていた。午後の光が射しているのに、なぜか部屋の中は妙に仄暗い。侵入者の後ろ姿さえもよく見えない。

不意に、私には予想外に、しかしごく自然に侵入者は私の方に振り向いた。自分がそこに立っているのが当然であるかのように.....。

それは、私だった。侵入者は、私の顔をしていた。私の探し求めていた、第二の私だった。

一体何がなんだかわからなかったが、驚きと喜びで、考える間もなく、私は『私』にすがりついて叫んでいた。ぐらぐらと『私』の肩を揺すりながら。

「私、私だ、私だ」

私は突然吹き出した。他人の私は私をげらげら笑い出した。その笑いは嘲笑そのものだった。私は可笑しくて仕方がないらしかった。

そうして私は言ったのだ。

「お前は、馬鹿だなあ」

笑い声だけが鳴り響いていた。いつの間にか発見機はランプを消して停止していた。私は、笑われようとも、我を忘れて狂喜していた。

鏡

<http://p.booklog.jp/book/87837>

著者：大きな水

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ookinamizu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/87837>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/87837>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ